

『青森県史 資料編 古代2 出土文字資料』

柴田 博子

一

驚くべきスケールの出土文字資料編である『青森県史 資料編 古代2 出土文字資料』（以下、本書とする）が、二〇〇八年三月に刊行された。二〇〇〇年度刊行の『青森県史 資料編 古代1 文献史料』、二〇〇三年度の『県史叢書 青森県史 資料編 古代1 補遺』に続く、三冊目の古代資料編である。A4判、八〇〇頁におよぶ本書は、青森県だけでなく北海道および東北地方、新潟県の計一道七県という、広域の古代出土文字資料三万点を網羅しており、この対象地域は日本列島の総面積の四割にも相当する。

かくも広大な地域を対象とされたのは、『資料編 古代1 文献史料』が新潟県・東北地方から北海道、さらにはサハリン、大陸沿海州までの広大な北方世界を対象として編纂され、これとペアを組み、両者をあわせて現青森県域の古代史を解明する素材にするためとのことである。自治体史編纂時、古代の文献史料編は地方の場合、地元と直接関わる史料だけでは成立し得ず、広域で収集するのが一般的であろう。しかし出土文字資料は現代の自治体による調査成果であるから、その範囲内で集成されることが多かったと思われる。評者がかつて『宮崎県史』における「日向国出土墨書土器資料集成」に携わったが、『宮崎県史』でも、

史料編では西海道に関する史料なども収集する一方で、墨書土器集成が対象としたのは七一年に大隅国を分置した後の日向国と考えられる範囲、すなわち現宮崎県全域と鹿児島県のごく一部の地域であった。ところが本書は、陸奥・出羽・越後の三方国から現在の北海道を対象とし、広く北方世界全体を一堂にまとめて提示しようと考えられた。文献史料編と対をなすという、当然のようでありながらもこれまで実現されなかったことを実行された、きわめて意欲的かつ壮大な取組みである。

二

本書の全体の構成は次の通りである。

序論——編集にあたって

第I部 青森県出土文字資料

第II部 古代北方地域出土文字資料（一）

一、墨書・刻書土器

1. 北海道出土の墨書・刻書土器
2. 岩手県出土の墨書・刻書土器
3. 宮城県出土の墨書・刻書土器
4. 秋田県出土の墨書・刻書土器
5. 山形県出土の墨書・刻書土器
6. 福島県出土の墨書・刻書土器
7. 新潟県出土の墨書・刻書土器

二、文字瓦

第III部 古代北方地域出土文字資料(二)

一、木簡

二、漆紙文書

第IV部 古代北方史関係金石文

なお、巻末に五十音順の遺跡索引、附録としてCD-ROMがある。

次に、それぞれの内容を紹介しよう。

第I部には、青森県内の様相・特徴などを解説した「青森県出土の文字資料」と「五所川原須恵器窯跡群の概要」、遺跡位置図、木簡九点と鏡一点の積文・説明と各実測図、そして青森県出土の墨書・刻書土器二六五二点の一覧表、出典、コラムとして一三世紀の紀年銘をもつ木簡の紹介、一部の土器の図版を載せる。なお、青森県では文字瓦と漆紙文書は未出土のことである。墨書・刻書土器は、判読不能のものを含めた全資料が遺跡ごとに表にされ、土器一点ずつについて、その積文・記銘方法(墨書・刻書など)・器種(須恵器・土師器など、坏・皿など)・記銘部位(体外など)・方向(正位など)・時期・出土遺構・備考(「記号」・異なる積文の可能性・五所川原窯産などの注記)・図版の頁番号・出典の番号が記入されており、きわめて詳細・精密である。しかも各遺跡について立地や性格などの概要が冒頭に示され、読者は遺跡の性格を知ることできて有難い。図版には一部の墨書・刻書土器の写真や実測図およびヘラ書き拓本が掲載されている。

従来の県史であればこの第I部で終わるところを、本書は続く第II部から第IV部に、青森県以外の一道六県の出土文字資料を、しかも青森県では出土していない文字瓦と漆紙文書も集成する。

第II部は、墨書・刻書土器と文字瓦を、道県・遺跡ごとにまとめていく。「墨書・刻書土器」には、まず各道県の様相・特徴の解説、遺跡位置図を載せる。表は一字程度の墨書・墨痕がある判読不能の資料や刻書「X」などを省略するものの、CD-ROMにはこれらをも掲載した表を収録している。「文字瓦」も墨書・刻書土器に準じた表にするが、同種の一字刻書、刻印瓦が多い遺跡では遺構ごとに点数をまとめ、末尾にいくつかの写真や拓本を掲載する。

第III部の「木簡」は、県ごとに概要を解説し、個々の木簡の積文と説明、一部の写真を掲載する。さらに対象地域で出土した一二六一点だけでなく、都城ほかで出土した関連する木簡一八点も掲げる。「漆紙文書」は、六県で出土した二三五点について、個別に積文と解説を載せていく。なお北海道では文字瓦・木簡・漆紙文書は未出土のことである。

第IV部は、一一八七年以前の陸奥国・出羽国に関わる金石文(木造佛像の胎内墨書や棟札など木製品を含む)と古印の集成である。金石文は年代順に二九点を配列し、参考資料三点を加えて、それぞれに積文と解説、いくつかのものについては写真を掲載する。また古印は一六点を表にし、写真もしくは印影を載せる。

そしてCD-ROMには、資料の図版は収録されないものの、墨書・刻書土器と文字瓦についてEXCELの表と、それらの積文を表現するために作字した文字や記号をTIFFの画像形式で収録して、検索を可能にしている。また木簡、漆紙文書、金石文については、校了時点で作成したPDFを収めている。

右に紹介したように、本書は県を越えた古代北方世界出土文字資料編となつてゐる。その特筆すべき成果は何よりも、かつてない広い地域から、しかも網羅的に資料を集成された点にある。一道七県において平成一六年度（二〇〇四年度）以前に出土した、公表されている文字資料を、釈読できないものもふくめて収録された。この成果により、古代の北方世界について、文献史料とともに出土文字資料からも様相を知ることが私たちは得たのである。その学恩ははかり知れない。

しかも、広域の資料を収録するに際し、多くの配慮がなされている。まず、本書が対象とする全地域にわたつて、さまざまな記載を統一的に編集されている。量的にもっとも多くを占める墨書・刻書土器についてみると、自治体史が集成を行う際の元になるデータは各遺跡の発掘調査報告書であろうが、それらは県や地域により、また報告書担当者により、遺構・遺物の用語やどこまで詳細に分類するかなど、それぞれ異なつてゐることが珍しくない。読者がもつとも困るのは、同じ用語を使つて別のものを指す場合である。たとえば「土師器」とあつても、黒色処理を施した酸化炎焼成の土器を指しているのか、黒色処理を施さないそれを指しているのか、分からないことがある。本書では、墨書・刻書土器の凡例によると、前者を「土師器」とし、後者は「赤褐色土器」「須恵系土器」の表記と合わせて「赤焼」に統一された。全国的にみれば、宮崎県でいわれる土師器は本書の「赤焼」にあたるなど、なお地域

差はあるのだが、本書は凡例に明記されたうえで統一されているから、読者としてはよく分かる。同様に、文字の記銘部位や方向、出土遺構の表記などについても、統一性を保つよう目配りされている。そのためには調査報告書の読み込みや原資料の実見など、大変手間のかかる作業が繰り返されたものと推測され、誠にありがたい編集である。これまでは複数の集成を集めてきても、記載の不統一ゆえ単純には比較できなかったが、本書ではこの地域の膨大な墨書・刻書土器について、数量的な比較検討が可能になつた。おそらくこの点が、本書編集の最大のねらいの一つであつたと推察され、それは現在の研究状況で可能な限りに果たされていると思われる。ただ、変遷を検討しようとする際、青森県出土の土器の中にも時期を「奈良く平安」「平安」と表記されるものがあるのは、年代順の配列に入れづらく、残念である。

文字資料の積文は、墨書・刻書土器では出典のそれを尊重しつつも、実見の結果、調査機関・所蔵機関の了解を得て改めた場合があり、しかも混乱を避けるため備考欄にもとの積文を記されている。文字瓦や漆紙文書でも可能な限りの表記の統一と、報告書に記載がなくても明らかなる場合には付記するなどの配慮がなされている。このような信頼のおける集成を、これまでとは桁違いの広範囲でなされたことが、本書の最大の成果であろう。しかも集成された資料三万点余のうち、青森県内出土の資料は一割未満である。古代部会の見識と委員会の決断に敬意を表するとともに、担当者の想像に余りある労を多としたい。

また、青森県だけでなく、第II部の墨書・刻書土器では各県ごとに様相の解説と遺跡位置図が、第III部の木簡でも県別の概要があり、それぞ

れの地域の内容を把握するに貴重かつ有意義である。青森県以外の解説にもレベルの高い叙述が多く、大いに教示を受けた。そして巻末の遺跡一覧は、掲載した全ての遺跡を五十音順で検索でき、至便である。

附録のCD-ROMも有難い。第II部の、紙面では省略された墨書・刻書土器をここでの表には収録しており、それによると各道県の墨書・刻書土器は、北海道四一点、岩手県二二〇二点、宮城県五六七九点、秋田県三五〇七点、山形県五二三七点、福島県五二〇六点、新潟県四五四一点である。これに青森県の二六五二点をあわせると、収録されている土器は二九〇六五点にのぼる。一瞥しただけでも陸奥・出羽・越後が、全国的にみて墨書・刻書土器の多い地域であることが窺える。これらの資料をデジタルデータで提供されたことで資料検索が簡便になった。さらに研究のためのデータ加工も可能であり、本書は研究利用を強く期待しているのである。この「一括資料」をいかに活用していくか、評者にとっても課題であり、今後が楽しみである。

なお、残念に思われるのは土器の写真・実測図の掲載点数がかなり少ないことである。本書は上質の紙を用い、しかも紙面で省略した資料もCD-ROMに収録されるのであるから、紙面にもっと多くの写真・実測図を載せる方法があったのではなからうか。『宮崎県史』の墨書土器集成では、転用硯や墨だめを除く全ての墨書・刻書土器の実測図と写真を掲載した。五〇〇点余という数ゆえ本書と比較できないが、本書が「序論」で写真の資料的価値を評価しておられるだけに、惜しまれる。

四

評者は本書を手にとってから、『宮崎県史』の墨書土器集成に入れられなかった、かつて日向国から分置された薩摩・大隅両国の墨書土器も集成してこそ、古代日向を理解する手がかりが得られるのかもしれないという思いがわきおこった。本書は画期的な出土文字資料集成であり、評者には大変刺激的であった。

そこで最後に、今後の課題と期待を申し述べたい。一つは集成を活用して北方世界の古代史を明らかにしていくことであり、出土文字資料の比較検討は評者にとっても課題である。いま一つは集成の続きである。宮崎では、「日向国出土墨書土器資料集成・補遺」として、少しずつ続編を公表している。本書は広域かつ膨大な集成であるから小回りは困難であろうが、刊行時の二〇〇七年度末までの三年間にも、対象地域ではおそらく一〇〇〇点以上の出土文字資料が見つかったのではないかと想像される。これからも増加し続ける資料をどうフォローしていくのか、自治体史という形ではなくとも、この財産を活かし、今後も積み上げていくような、各地域の取組みに期待したい。

(A4判、八〇〇頁、青森県、二〇〇八年三月刊、五九八五頁)
(しばた・ひろこ 宮崎産業経営大学法学部准教授)